

『カンタベリ物語』 (*The Canterbury Tales*)の 写本と初期刊本

中尾 佳行* 池上 忠弘**

The Manuscripts and Early Editions of *The Canterbury Tales*

Yoshiyuki NAKAO* Tadahiro IKEGAMI**

ABSTRACT

This paper is an attempt to describe and explain how and why textual information of the manuscripts and early editions of *The Canterbury Tales* contributes significantly to its literary as well as linguistic interpretations. Our focus is on the Hengwrt MS (the oldest and therefore temporally closest to Chaucer's original), the Ellesmere MS (the edited and completed text by the same scribe, Adam Pinkhurst), and the first printed editions (Caxton's first and second). We tentatively made a multi-layered parallel text of the MSs and the printed editions in order to make the text relatively seen. Hanna III's textual explanation of the *Tales* is also included.

キーワード：『カンタベリ物語』、写本、ヘングウット写本、エレズミア写本、
初期刊本、キャクストン版、ベンソン版、読みの多様性

1. はじめに：本論の目的、背景、方法

本論の目的は、チョーサーの『カンタベリ物語』の写本及び初期刊本がどのように作成されたかを、先行研究をベースに整理し、この過程で見られるテキストの異同へのメタ認知が、当該作品の解釈にいかに関与しているかを示すことである。従来多くの研究は、現代の編集本に依拠して実践されてきた。しかし、それは編者によって再建された言語を通しての研究であり、必ずしもチョーサーの言語に依拠した研究とは言い難い。現代の編集本を一端リセットして、チョーサーの写本及び初期刊本に立ち戻って、チョーサーのテキストを見直し、その上で彼の言語及び文学を再評価することが緊急課題であるように思える。本論は共著者の二人が何度も意見交換する中で作成された。多くの先行研究の成果を参照したが、共著者の一人、中尾他による科研プロジェクト（課題番号 17K02529）、電子版多層パラレルテキストの作成、及びそこから検出される新たな事実、あるいは読みの多様性（ambiguity）は、未だ途上ではあるが、これまでの研究を前進させる新たな手法として成果を生みつつある。

そこで本論では、2で本の歴史を振り返り、3で現代の刊本の底本であるベンソン版を取り上げ、4では、チョーサーテキストの種別を記述し、5ではテキストと解釈の問題を扱う。6と7は、いわば本論の拡張部で、『カンタベリ物語』テキストの批評史を扱う。6は、ベンソン版でのハナ（Hanna）IIIのテキスト批評、7はハナIIIの物語順序の記述である。8はマニスクリプト・コンテキストと初期刊本、活版活字印刷の問題、9は本論のまとめである。

2. 本の歴史—写本とは—

グロリエ・大塚幸男（1992）は、「本」について次のように述べている。「書物は・・・人間の思想の助けとなるべく人間によって考えだされた道具である。そのようなものとして、書物はそれが伝えるこの思想とは独立に、研究の対象となる、この研究は、書誌学あるいは（もっと適切に）書物学（ビブリオロジー）と名づけられ、技術的、社会学的、経済学的、歴史的、芸術的、更には心理学的見地から書物を見る。」また次のようにも言う。「書物の進化の概要を跡づけてみることにしよう。この進化はまだ終わっていないし、人類そのものの進化とともにしか終わらないであろう。」

我々が見ていく中世の本は、どのような進化の過程を示しているであろうか。中世の本は「写本」という形で存在する。池上（2014: 42）は次のように述べている。「すべて手作りの職人芸の産物である。注文に応じて作られた高価で貴重なものだった。今我々が知っている紙を使う活字印刷は十五世紀中頃マインツで始まるので、ずっと後の中世末期になる。原作者の書いた原稿に相当するものはほとんど存在しない。十四世紀末チョーサー時代の詩人トマス・ホックリーヴ Thomas Hoccleve の自筆写本等例外的である。作者名が分からない作品が多く、名前が分かったとしてもその人物については詳しいことはよく分からない・・・現存する中世の本は羊皮紙 vellum（上質）、parchment に書かれた写本 manuscript である。学のある専門職写字生 scribe が書き写したものであり、写本彩飾師 illuminator が装飾を施し絵を入れたりして製本されると上等な芸術品となる。」羊皮紙を折り畳んだものをいくつも重ねて、帖(quire)が作られた。折り畳む回数によって本の判型（二つ折り版、四つ折り版、八つ折り版等）が決まっていた。その帖をいくつか束ね、その背を糸でかがって、冊子体

(Codex) 一冊に統合したのが写本である。サージェント (Sargent) (2013: 228)によれば、写本はそれぞれみな違っている。同じ作品のどの二つの写本をとってみても同一のものはない。意図的であれ非意図的であれ、全ての写字生は写本手本(exempla)を写し取るとき、違い(variation)が生じている。他方、後の印刷本は、大量の、安価で、同一のコピーを産出することができる。『カンタベリ物語』に関して言うと、15世紀に制作された現存写本の四分の一は抜粋作品を集めた写本アンソロジーである。15世紀は写本と活版印刷本が共存した時代であり、1532年になってはじめてシン(Thynne)によってチョーサー全集が完成、活版印刷された。一般読者に読みやすくするための「本文」textの作成、「校訂本」critical(revised)editionの編集はシンが初めてであるが、以後長い歴史を辿り、今日翻訳の底本とされているベンソン(Benson)に至る。池上(2014: 42)は、本文の研究者は、「語学、文学、哲学、文化、歴史を含む「文献学」(philology)を扱う必要性を強調している。

チョーサーの『カンタベリ物語』の写本と初期刊本について具体的に説明する前に、ブリュノ・ブラセル『本の歴史』(1998: 17-73)を参照して、「本」が「巻物」から「冊子」へ、冊子から活版印刷へと、どのようにテキストの形態が推移してきたかを概観しておこう。

「本」の語源は、ラテン語の liber(樹木の内皮)、ギリシャ語の biblion(パピルス)で、いずれも文字を書きつけた素材を表す。パピルスはギリシャ・ローマ時代に使われたが、折り畳みにくく、表裏両面に文字を書くことができなかった。しかもパピルスは何枚も繋げて棒に巻いた巻物の形で作られた。本の歴史における最初の革命は巻物に代わり冊子(codex)、今日見られる形の本が現れたことである。冊子という新しい形態は材料に羊皮紙が用いられるようになったことに関係している。冊子は、紙葉を重ね合わせて閉じ、取扱いが楽で保管もしやすく、かさばらないので持ち歩きにも便利、さらに表裏両面に文字を書くことができた。紙(paper)が出現するまで羊皮紙が中世の写本の主たる材料であった。羊皮紙で1冊の本を作るには何頭分もの皮、平均的な大きさの本で約15頭分も必要で、かかる費用はばかにならなかった。羊皮紙の再利用もあった。ところで、英国での安価な紙の使用は、パメラ・ロビンソン(Pamela Robinson)によると、1382年と1414年の間で、確実な時期の写本は1390年である(ロバーツ(Roberts) 2015: 162)。

本の書き手の多くは、何よりもまず過去の文献の編纂者であり、注釈者であった。中世においては修道院の図書室だけが大量の本を所蔵する場所であった。しかし12世紀末以降、都市の勃興に伴い各地に大学が設立された。大学の発展で、それまで修道院の写本室に独占されていた本だが、その需要が大きく高まった。民間に写本工房が作られ、羊皮紙職人、写字生、写本の装飾師、製本職人、等、本に関わる職人たちはそれぞれ独自の同業組合を持つほどの勢力を形成していった。グロリエ・大塚幸男訳(1992)によれば、校正者または校閲者は、たいてい工房の長であった。都市の発展による市民階級の台頭は、法律家、商人、大学人等、聖職者以外の読者層を出現させた。従来の本の生産では追いつかない様々なジャンルの本に興味を示した。騎士物語、歴史書、演劇の台本、聖人伝など。12世紀からはしだいにラテン語の地位が後退し、各国の日常語で書かれた文学作品が現れるようになる。

写字生は、写本制作において、鉛筆や鉛の芯等を用いて縦横に罫線を引き、本文部分と余白部分を割り振った。羊皮紙の罫引きはページ全体に均衡と調和を与えた。スペース節約のため、文字をぎっしり、注釈は欄外の余白部分に書いた。略記法(語の短縮、略語、慣用記号の使用)を用い、古書体学の専門家でないとは解読できないものであった。製本職人が正しい順序で折りを重ねていけるように、折りごとの番号を記したり、次ページ冒頭の言葉をページの下部欄外に記すことも行われた。

中世ヨーロッパには様々な書体が相次いで現れた。ロバーツ(2015: 161)によると、英国では、Gothic Textualis に変わって、ビジネスハンドである Anglicana Formata が13世紀から16世紀にかけて使われた。1375年からは新しい文字、イタリアで始まった Secretary が現れた。

冊子は挿絵の技術の進歩を促し、やがて華やかな写本装飾の技法が誕生する。中世初期の絵画に関する最も重要な資料でもある。写本装飾は、12世紀末までは修道院内で行われていたが、民間の工房の出現とともに、都市に住む写本装飾師の仕事になった。本の主要な消費者である大学街に集まり、民間工房では一種の分業も行われた。絵師が細密画を描き、写本装飾師は「二次的な」装飾を行うのが仕事だった。写字生が装飾用に残しておいた余白部分に縁取りを書き入れたり、見出し、写字生が書いておいた段落を示す印やタイトル、頭文字等に装飾を施した。

分業について付言すると、ロンドンでは1403年にギルドが組織された(グロリエ・大塚幸男訳)。ハナ(Hanna) III(2014: 153)は、チョーサーの写字生で唯一特定されているアダム・ピンクハースト(Adam Pinkhurst)は、このギルドの一員だと指摘する。『カンタベリー物語』Hg(Hengwrt 154. Peniarth 392 D, National Library of Wales, Aberystwyth)写本とEl(Ellesmere 26 C 9. formally Lord Ellesmere's, now Henry E. Huntington Library, San Marino, California)写本の写字生アダムは、ロンドンの法律文書の書記、地方ギルドの一人である。ムーニー(Mooney 2006)は、彼がギルドのメンバー本にサインしているのを見つけた。彼らが書き記したものは本物であるということの証明にサインが使われた。アダムは1392年のギルドの記録本に登録されている。

冊子の出現から活版印刷術の出現までには1千年以上時が経過した。本の形態はほぼ完成し、グーテンベルグ(1398?-1468)の発明も、それを忠実に踏襲するものにすぎない。しかし、彼が登場した15世紀中葉においてまだ本は貴重品であることに変わりはない。印刷本は紙の登場と共に始まる。拡大を続ける本の需要と相まって手書きによる写本だけでは限界があった。中世の写本の主な材料として、より安くて柔らかい素材、ついに紙が登場しなければ、15世紀のヨーロッパにおける印刷術の飛躍的な発展はありえなかった。

グーテンベルクは14世紀末、マインツの富裕な金銀細工師の家系に生まれた。彼による活版印刷の金字塔は『四十二行聖書』1454年の印刷である。二つ折り版で使用された活字は300種、のべ335万個、典礼写本のゴシックをまねた。印刷された本の形態は、それ以前と断絶したわけではない。写本、印刷本等を問わず、本は、紙葉を畳んだ「折り」を単位としてつくられた。活字も既存の書体をまねて作られ、宗教書にはゴシック体が、古典作品にはユマ

ニスト体（14～15世紀のルネッサンス期に現れた書体で、丸く小さくスペースをとらない）が用いられる点も同じだった。印刷工房を出た後も、本の完成までにはまだ頭文字の装飾、彩色画、句読点入れ等の手作業が残されていたのである。

3. チョーサーの本文（text）：ベンソン（Benson）版

現在チョーサーを読む場合、通例ベンソン版が底本として使用されている。しかし、ベンソン版はチョーサーの言語そのものではない。それは現代の編者が再建したものにすぎない。本論共著者の中尾がシェフィールド大学に在外研究した時（1989-1990）に、ノーマン・ブレイク（Norman Blake）教授から言われたことを思い出す。「君はここで何をしたいのですか。」「チョーサーの言語を研究したいです。」「チョーサーはどこにいますか。」「・・・ベンソン版を基に言語研究したいと思っています。」「ベンソン版はチョーサーの言語ですか。」「いや違います。写本・・・」「ベンソン版はどの写本を使っていますか。」「エルズミア写本を基に・・・」「エルズミア写本だけですか。」「いや、ヘングウート写本も適時・・・」「ヘングウート写本は、チョーサーの言語ですか。」1、2分の間にチョーサーの言語そのものはどこにも存在していないことに気づかされた。

チョーサーの研究には、まずは本文の作成、校訂本の作成が必要である。この基礎的作業が、言語研究・文学研究の出発点である。しかし、チョーサーの場合、この本文が未定である。チョーサー自身が書いたオリジナルは今日まで見つけられていない。テキストは、殆どの場合彼の死後写字生によって書かれた写本である。スタブズ（Stubbs 2000）によれば、最も古いヘングウート（Hengwrt）写本はチョーサーの存命中に書き始められた可能性がある。『カンタベリ物語』は当時人気があった作品で、その写本は部分的なものを含めれば80を超えて存在している。因みに『トロイルスとクリセイデ』（*Troilus and Criseyde*）は16写本である。『良心の呵責』（*The Prick of Conscience*）の400には及ばないが、ラングランド（Langland）の『農夫ピアズ』（*Piers Plowman*）の50余り、ガワー（Gower）の『恋する男の告解』（*Confessio Amantis*）の55（Echard 2004: 74-7）に比べるとはるかに多い。『サー・ガウエインと緑の騎士』（*Sir Gawain and the Green Knight*）は小さな一つの写本（Cotton Nero A.x.）である。

ベンソン版に至るチョーサー・テキストの伝承（textual transmission）は複雑である。以下で具体的に述べるが、写字生の編集態度、口承性の文化から読む文化への移行、テキストそのものに対する社会・文化的価値付けの変化、英語史的な変化、校訂本の意識の発達等、様々な事情が編集プロセスには関わっている。テキスト上の一つの変異もこのような複雑な背景から生起していることを見逃してはなるまい。

4. テキストの種類：写本と初期刊本（incunabula）（1500年までに印刷された刊本）

テキストの編集は5つに大別できる。

- [1] 写本のファクシミリ
- [2] ディプロマティック・テキスト
- [3] 特定写本を基に編集したテキスト
- [4] 写本を折衷的に用いて編集したテキスト
- [5] 写本・初期刊本を転写・電子化したテキスト

[1]は、写本そのものの画像である。写本レイアウトもそのままに示され、その画像はテキストを理解するパラテキスト（paratext）¹として、即ち、活字テキストと相互補完的に機能してもいる。[2]は単一写本をできる限り忠実に再建したものである。スペリング、句読点、省略、削除、挿入等も含めて転写している。現代のような文法的な句読点の編集は施されていない。[3]はブレイク版（1980）に典型的だが、特定写本、ヘングウート写本を忠実に反映

した現代の刊本である。しかし、飾り文字は無視され、更には中世の文字は使わずスペリング **p** が **th** にモダナイズされ、また写本にはない文法的な句読点も付けられている。[4]はベンソン版(1987)に典型的だが、特定写本エルズミア(Ellesmere)写本を軸にしながらも、ヘングウット写本や他写本も取り入れられ、折衷的に編集されている。文法的な句読点については、[3]と同様である。写本による文学の語りでは、それを基に小集団に口承的に伝えるのが主流であって、視覚的ではなく聴覚的な情報が重要となる。写本を手を読む読者は、裕福な貴族や商人等、ごく限られた数であろう。この状況では写本の視覚情報は文字テキストを読み解くパラテキストとして機能する可能性がある(松田 2010 参照)。写本では現代のような文法的な句読点は付けられてはいない。[3]、[4]の刊本は、現代の読者が読むことが想定されており、文法的な句読点が編者により付けられている。しかし、それは編者の解釈に委ねられ、編者によりその付け方が流動的であるので注意を要する。[5]は、写本並びに初期刊本を忠実に転写、電子化したもので、データ処理を精確かつ迅速に行うことが可能である。写本オリジナルのイメージを転写テキストに対応させたり、また異写本・異刊本をパラレルに並べた電子版多層パラレルテキスト(multi-layered parallel text)も可能である。

「総序」(General Prologue)の修道士の紹介の一部を[5]の電子化テキストから引用する。中尾他の科研・共同研究(課題番号 17K02529)で作成の電子版多層パラレルテキストの一部である。

```
GP 178  HG: That seith /       þt hunterys been none ho_ly men
        EL: That seith / that  hunter_s beth n_at hooly men
        BL: That seith  that  hunterys been none holy  men
        BN: That seith  that  hunter_s be_n n_at hooly men,
        X1: That seith  that  hunter_s be__no_t holy  men
        X2: That seyth   that  hunter_s be__no_t holy  men
```

注：GP=General Prologue, HG=Hengwrt MS, EL=Ellesmere MS, BL=Blake's edition (1980), BN=Benson's edition (1987), X1=Caxton's first edition, X2=Caxton's second edition ; HG を比較の起点とし、アンダーバー(下線)はそれとの照合で文字列に削除があることを示す ; HG と EL はテキスト編集タイプの[2]、BL は[3]、BN は[4]を電子化したものである。

ヘングウット写本とエルズミア写本を書いたアダム(ジェーン・ロバーツ(Jane Roberts)の反論については MÆ. 80.2, 2011 (pp. 247-70)を参照)は、ロンドンで織物業の書記を務めており、チャーサーの職場オールドゲイト(Aldgate)の近くにおいて、お互い面識があり、アダムは書記の仕事をする傍ら、チャーサーの写本制作に関わっていた。ヘングウット写本は当該写本で最も古いもので、チャーサーのオリジナルに最も近いものと考えられる。急いで制作され、口承的な特徴を残し、物語の順序等、編集が十分に行われていない特徴がある。エルズミア写本は編集を施し、より完全なテキストへと仕上げられたものである。エルズミア写本は書き言葉的な編集が進んだとも言える(cf. ホロビン(Horobin) 2003)。チャーサーの言語や文学を良く知っていたと考えられるアダムが書いたことは無視できない。また同じ写字生でも異同が見られるのは単に方言の問題ではなく、編集態度の問題も関係することを示唆している。X1はキャクストンの第1版(1478)、どの写本を底本としたかは現在のところ同定されていない。第2版(1984)は、キャクストンが序論で、第一版の不備を「より良い写本」を基に改善した、と述べたものである。この「より良い写本」が何かの後付けも十分に行われていない。

HGは写本に忠実に転写したものであり、句読点のヴァーギュール(virgule)も再建されている。ELも同様に写本に忠実に転写したものである。HGの *been* は *beth*、また HGの *none* は *nat* に替えられている。後者は語否定から統語否定への変更でもある。BLはHGを忠実に

反映したもののだが、一部スペリングがモダナイズされている (p→th)。BNはEL写本を軸にしながらも、他写本も取り入れ、ELのbethはbenに替えられている。menの後に句読点のコンマが付けられてもいる。X1もX2も統語否定を踏襲するが、否定辞はELのnatではなく、notである。これはサミュエルズ (Samuels) (1963)²の言ったロンドン英語のType IVである。チャーサーの英語はType IIIのnatである。X1のseithはX2ではseythに替えられている。句読点はない。

次は「荘園管理人の話」からの一節である。

```
ReVT 321  HG: This langʔ nyghtʔ # ther tydes me na reste
           EL: This lange nyght / ther tydes me na reste
           BL: This lang_ nyght ___ther tydes me na reste,
           BN: This lange nyght ___ther tydes me na reste;
           X1: Thys longe nyght ___ther tyd__ me no reste
           X2: This longe nyght ___ther tyd vs __no reste
```

注：#はHGにELのヴァーギュール(/)が無いことを示す。

HGはlang^ʔに単音節形容詞・弱変化を示すfinal -eを付していないが、ELはそれを付している。HGは北部方言で逸早く進んでいたfinal -e削除の状態を反映しているが、ELは母音のaは北部方言を踏襲するものの、final -eの付加は、チャーサーの標準形に直している (ホロビン 2003 参照)。BLはHG、BNはELに準拠している。resteの後にBLは読点、ELはセミコロンを加えている。X1とX2は、母音もfinal -eの付加もチャーサーの標準形に編集している。更に言うと、HGとELは共に動詞の3人称単数現在のtydes、そして否定辞の母音aは、北部方言を採用しているが、X1とX2は共にtydとesが削除され、noとoの母音に編集している。X1の代名詞はmeだが、X2ではusに替えられている。ケンブリッジの学生Aleynに、自分だけではなく、Johnも含めて、この夜なが自分たちは寝付けない、と言わせている。

5. 写本と読みの多様性

写本の異同、また写本と刊本の差異は、テキストの解釈の層の問題に深く関わる。ムーア (Moore 2015)は「賄い方 (Manciple) の話」の最終部、沈黙することの意義付けをしている場面を取り上げ、写本と刊本の違いが読みに大きく関わることを指摘している。エルズミア写本とベンソン版を比較してみよう。

<エルズミア写本>

```
205v MA 0213 But nathelees / thus taughte me my dame
205v MA 0214 My sone / thenk / on the Crowe on=goddes name
205v MA 0215 My sone / keep̄ wel thy tonge / ʔ keep̄ thy freendʔ
205v MA 0216 A wikked tonge / is worse than a feendʔ
205v MA 0217 My sone / from a feend / men may hem blesse
205v MA 0218 My sone / god of his endelees goodnesse
205v MA 0219 Walled a tonge / wt teeth # ʔ lippes eke
205v MA 0220 For man sholde hym auyse / what he speeke ....
205v MA 0258 Kepe wel thy tonge / and thenk vp on the Crowe
```

ヴァーギュールがあるが、それ以外の句読点は施されていない。引用を示すクォーテーションマーク (quotation mark) は無い。同箇所はベンソン版では、次の通りである。

<ベンソン版>

MA 0317 But nathelees, thus taughte me my dame:

- MA 0318 “My sone, thenk on the crowe, a Goddes name!
 MA 0319 My sone, keep wel thy tonge, and keep thy freend.
 MA 0320 A wikked tonge is worse than a feend;
 MA 0321 My sone, from a feend men may hem blesse.
 MA 0322 My sone, God of his endeles goodnesse
 MA 0323 Walled a tonge with teeth and lippes eke,
 MA 0324 For man sholde hym avyse what he speeke. ...
 MA 0362 Kepe wel thy tonge and thenk upon the crowe.”

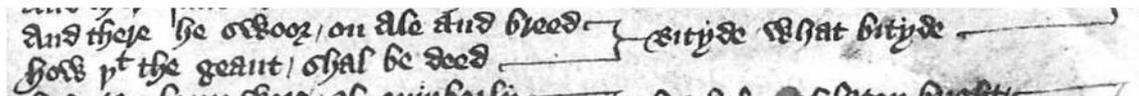
2行目から最後までダブル・クォーテーション・マークで囲われ、母親のスピーチとなっている。ムーア(2015: 172)は写本においては引用符がないことから、*narrative*か*speech*の判断は微妙であり、*My sone ...*と始めていても、これは説教に特徴的な *gnomic* なパターンでもあり、*narrative* の延長線上でも読み取れ、また伝達動詞の“*taught*”も人物の直接話法ではなく、語り手の間接的な言説を導く、と解している。中世のテキストにおいては誰が話したかよりは、その内容、権威 (*autocrite*) を重視し、換言すれば、聴衆に対する *pedagogical* なスタンスが見られる、と指摘する。この教訓は賄い方の母親が彼に、賄い方が巡礼者に、この物語テキストが読者に向けて提示されたものでもある、ベンソンが引用符を付けると写本の重層的な解釈幅を減じてしまうと論じている。

ムーアは次の「サー・トパスの話」においても同様に直接話法と間接話法の融合性を指摘している。場面はサー・トパスが巨人と何が起ころうとも戦うと豪語する箇所である。

<ヘングウット写本>

- 215r TT 0160 And there he swoor / on Ale and breed
 215r TT 0161 How þ^t the geant / shal be deed
 215r TT 0162 Bityde / what bityde

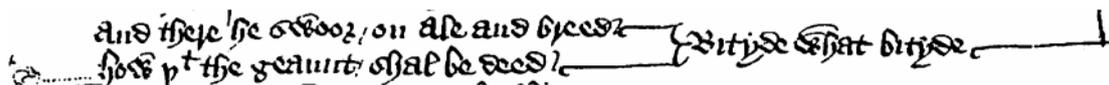
<ヘングウット写本ファクシミリ>



<エルズミア写本>

- 152v TT 0160 And there he swoor / on Ale and breed^ð
 152v TT 0161 How þ^t the geant⁷ shal be deed^ð
 152v TT 0162 Bityde what bityde

<エルズミア写本ファクシミリ>



<ブレーク版>

- <Th> 872 And there he swoor on ale and breed
 <Th> 873 How that the geant shal be deed
 <Th> 874 Bityde what bityde.

<ベンソン版>

TT 0872 And there he swoor on ale and breed

TT 0873 How that the geaunt shal be deed,

TT 0874 Bityde what bityde!

2行目の *shal* は発話動詞 *swoor* の過去形と時制の一致がなく、現在形であり、また3行目の *Bityde what bityde* は、譲歩的な誓言、スピーチを彷彿とさせるものである。刊本では引用符を付けてもよいような箇所である。ブレイク版の句読点はベンソン版に対し抑制的であるが、ベンソン版は、最後の誓言の後に感嘆符を付け、スピーチの直接性を示そうとしているかのようである。いずれにしろ、両刊本とも引用符を付けていないのは、*swoor* の文を間接話法と見なしているからであろう。しかし写本自体は直接・間接いずれにもスリップする柔軟性を潜在させている。更に言えば、ヘングウット写本とエルズミア写本は、テイルライム（「サー・トパスの話」では基本 *aabaab*、*aa* は4強勢、*b* は3強勢の6行からなるスタンザで構成されている）の *b* 行が右のマージンに書かれ、強勢の量の縮減が強調されている。（本物語ではボブ行（1強勢）がマージン右端に描かれ、ハイライトされてもいる。）写本レイアウトはパラテキストとして物語の解釈の一つの層を浮かび上がらせるが、刊本では、パラテキストの意味合いは捉えられない。本節で示している両写本のディプロマティック・テキスト³でも、写本レイアウトまでは再現していない。

以上、写本を丹念に見ていくと、現代の編集テキストでは容易に捉えられない、複数のテキスト、複数の解釈の層が生み出されてくることが分かった。

6. 『カンタベリ物語』のテキスト批評：ハナ(Hanna) IIIに基づいて

『カンタベリ物語』を翻訳する場合、多くはベンソン版を底本として行われている。ベンソン版の本文の説明はハナ III が担当している (pp. 1117-1121)。80余りの現存写本からのテキスト選定のプロセスと、その選定から漏れたものの、他の刊本に取り上げられた注意すべき異型テキストを、注記すると言っている。写本及び刊本研究が歴史的に叙述されており、それまでのテキスト批評の全体像が描き出されている。

この全体像を通して、特定写本を特に重視して見るのではなく、また刊本だけに限定して見るのではなく、チョーサーのテキストは写本を基に再建されたものである、と認識する。これからハナ III のテキスト解説を紹介するが、最近の研究から適時情報を補完していくことを断っておく。

『カンタベリ物語』は、完全なものも部分的なものも含めれば、全部で82写本現存している。「免罪符売り」のモーガン図書館所蔵本を独立したものと見なせば、83写本と言える。シルヴィア (Silvia, Ch and ME Sts., 153-63) によれば、そのうち55写本が物語を完全に網羅している。物語は写本だけで再現されているのではない。6つの初期刊本を通して、全て写本の特徴が写し出されている。初めての刊本、1478年のキャクストン版 (Cx1, STC 5082) は、現存していないある写本を基にしたのは明らかである。その第2版 (Cx2, STC 5083, c. 1484) の序論の言い訳は既に述べた通りである。

他の4つの初期刊本は、ピンソン (Pynson)、c. 1492 (STC 5084)、ドゥ・ウオード (de Worde)、1498 (STC 5085)、ピンソン、1526 (STC 5086)、そしてはじめての全集本シンの第1版、1532 (STC 5068) である。これらは線上的な連続性があり、Cx2 かその直接的な系統の版に基づいている。とは言え、それぞれは独特の変異型を含んでいる。写本を無作為的に参照したり、16世紀によくあるよろず修繕屋がやるような直し方である。概して編集が後期になればなるほど、その価値は減じてくる。

現代編集本を編むに当たっては、様々なテキストが利用できる (1117 ページのリスト)。下記のリストでアステリスクのついた8つの写本は、チョーサー協会 (The Chaucer Society、

フレデリック・ジェイムズ・ファーニヴァル (Frederic James Furnivall) が 1868 年に設立) が完全な形で刊行している。6 つはチョーサー協会の第 1 シリーズで、つまり第 1 巻と第 14 巻は断章 I (Fragment I)、第 15 巻と第 25 巻は断章 II, VII, VI, III、第 31 巻は断章 V、第 37 巻は VIII, IX、そして第 49 巻は断章 X を刊行した。これらの写本に、協会は第 73 巻で Ha4 を、第 95, 96, 97 巻で Dd の刊本を加えた。様々な写本のページ (葉) を写真で再現した刊行も行った。

現存写本は、下記の通りである。(記号化された写本名)

Ad1, Ad2, Ad3, Ad4, Ar, Bo1, Bo2, Bw, Ch, Cn, *Cp, Ct, *Dd, D1, Do, Ds1, Ds2, Ee, *El, En1, En2, En3, Fi, *Gg, Gl, Ha1, Ha2, *Ha4, Ha5, Hl1, Hl2, Hl3, Hl4, He, *Hg, Hk, Hn, Ht, Ii, Kk, *La, Lc, Ld1, Ld2, Ll1, Ln, Ma, Mc, Me, Mg, Mm, Ne, Nl, Np, Ox1, Ox2, Ph1, Ph2, Ph3, Ph4, Pl, Pp, Ps, *Pw, Py, Raw, Raw, Ra3, Ra4, Ry1, Ry2, Se, Si, Sl1, Sl2, Sl3, St, Tc1, Tc2, Tc3, To
(写本のフルネーム及びその所蔵施設については、ベンソン、pp. 1118-1119 を参照。)

実際には他の写本も多く存在していた。それらは中世の遺書、中世あるいは中世後期の図書館のカタログや様々なオークションでの売却カタログに記されている。これらの証拠の多くは、J. M. マンリー・E. リカート (John Matthew Manly and Edith Rickert) の『カンタベリー物語』の「テキスト」、8 巻本 (Manly and Rickert, *The Text of the Canterbury Tales*, 8 vols., Chicago: University of Chicago Press, 1940) にまとめられている。失われた写本については、マンリー・リカート (Manly and Rickert 1940, I: 606-45) を参照。失われたテキストである他の写本の可能性は、ウィルソン (Wilson, *Lost Lit of Med Eng*, 1952, 147-48) にも言及がある。

『カンタベリー物語』本文批評の重大な分岐点は、1940 年である。マンリー・リカートの 8 巻本の記念すべき業績で、本物語の編集は一大転換した。彼らの編集はロビンソン (F. N. Robinson) の編集方針を古臭い、と一掃した。このためロビンソンは第 2 版、1957 年で読みを変更し、その長いリストを付けた (Robinson, 1957, 883-85 を参照)。

ロビンソンは、彼以前の刊本でおこなわれた方法、ほんのわずかな写本を参照してテキストを準備したのだ。彼がテキストを読み解く材源は、チョーサー協会が選んだ 8 つの写本の転写版だった。確かにこれら 8 つは、『カンタベリー物語』のどんな話 (Tale) についても最重要な写本ではあるが、チョーサー協会が選んだ写本は、このうえなく詮索好きの手法がとられている。その結果、これらの写本だけではテキストは偏見の入った情報になりかねない。チョーサー協会のためにファーニヴァルが選んだ写本については、ベーカー (Baker, *Editing Ch*, 157-69) を参照。

最近のテキスト研究 (ブレイク 1980、スタブズ 2000、ホロビン 2003: 中尾付記) を通して、チョーサー協会の転写は他の写本を犠牲にして自分たちの資料を過度に強調していることが分かってきた。チョーサー協会は、ヘングウット写本、残存する最も古い写本を刊行し、またマンリー・リカートはこれを最も重要と考えたこともあり、この写本は他の写本とは一線を画した読みを示している。ヘングウット写本の読みは、8 巻本のテキスト編集では、他の写本から莫大なテキスト証拠が提供され、歩み寄りを余儀無くされている。3 つの大変重要な写本、エルズミア、Gg, iv. 27 (Cambridge University Library)、ハーレー 4 (Harley 7334, British Library) は、採用すべきテキストの数の上では、常にヘングウットよりは勝っており、それらはしばしば違ったテキスト候補となっている。更に、ロビンソンは後期ヴィクトリア朝の編集伝統を継承しており、これら 3 点の古写本 (codices) (エルズミア、ジージー、ハーレー 4)こそ、チョーサー・テキスト伝承の中心的な姿と見なした。

マンリー・リカートの 8 巻本の編集では、ヘングウット写本の読みは、他の写本材源からのヴァリエーションによって峻別され、際立てられた。ハナ III に追記すると、サージェント (2013) は、ヴァリエーション⁴は、中世のテキスト特徴は古代や現代とは違い、写字

生はヴァリエーションを行ったとしても、それは中世の特徴と考えているのかもしれない、と指摘した。3つの写本、コーパス・クリスティ写本 (Corpus Christi College 198, Oxford)、ランダウン写本 (Landonwe 851, British Library)、ペットワース・ハウス写本 (Petworth House MS 7) は、‘ショップ写本’と言われる特徴がある。写本は販売のために職業的なロンドンの写字生によって準備されたのである。これらの写本は、多くが1440年～1490年の間につくられ、この伝統を示す初期の代表例である。8巻本の多くの証拠は、ヘングウット写本の読みを過小評価し、他の写本の証拠を強調する傾向、つまりロビンソンのテキストに繰り返される傾向を表している。

おそらくマンリー・リカートの最も偉大な業績は、様々な写本のヴァリエーションの関係を明確にすることにあつた。この方法はとてつもなく複雑であることがわかった。証拠数が膨大な数になるためだけではない。この二人のシカゴ大学の編集者は、『カンタベリ物語』全体に通底する、一貫性のある関係を叙述することは不可能であると観念した。彼らは話と話を、時には個々の話の内部を、関係付け、テキスト証拠にどのような変異がみられるかを説明することしかできなかった。

マンリー・リカートの著作に関する初期の書評は、その著作に対する批評の方向性を確定付けた。評者は、テキストの編纂に携わる労苦に印象付けられたが、大抵の場合テキスト上の発見に至る複雑性に圧倒されてしまった。あるものは、複雑な証拠ゆえにどのようにしてテキストがそこから構築できたのか、当惑してしまった。しかし、全体的に見れば、誰もその結果にあら探しをしようなんて思わなかった。これは驚くべきことである。特にこの二人が全ての現存写本の先祖としてO'とよんでいる写本(チャーサーの自筆原稿Oと言うよりも)だけを構築しようと望んでいることを想定すると、尚更そうである。このように想定した結果、テキストは編者が明らかに間違いだと思っている多量の読みを刊行することとなった。この著作に対し初期に定着した反応は、殆ど40年間変わらなかった。デンプスター (Dempster, PMLA 61, 1946, 379-415) は、初期書評者を困惑させた根本的な問題を説得力のある形で説明している。いくつかの周辺的な問いかけを除けば (Strould, MLN 68, 1953, 234-47; Ryland, NM 73. 1972, 805-14)、この二人の編集本は、何年もの間、多くの場合精査されることもなく、金字塔として認可され続けた。

最近、事態は急激に変わっていった。学者は、過去以上にマンリーとリカートのテキストの状態に関する仮説、彼らのテキストに対する方法論、そして彼らの方法論を具体的問題に適用した時の注意の仕方について疑問をなげかけてきている。この方向での最初の反撃はドナルドソン (Donaldson, Speaking of Ch, 1970, 102-18) による殆ど脇台詞のようなものであった。『カンタベリ物語』のテキストに対してもっと幅広く捉えた改訂者の読みは、ケイン (Kane, Editing Ch, 207-29) とブレイク (Blake, ES 64, 1983, 385-400) に見られる。このような分析の結果から、マンリー・リカートの写本関係の言語資料は恐らく暫定的な考察の域を出ないものであることがわかった。

マンリー・リカートの第2巻のほとんどは、写本の精密な分類に当てられている。彼らは最初に“constant groups”を設定している：間違った読みを終始共有するペア及びペアより大きな写本集団である。これら“constant groups”は、合わせることによって、より大きな集団を形成していくことができる。尤もそれらはメンバーがしばしば変異する集団ではあるが。二人の編者は、『物語』全体の伝承の道筋というよりは、テキストの一つひとつに対して関係する写本の系統を調査している。(ハナ III にサージェントの写本エラーの見解を追記する。「recension⁵の積極的使用には批判的である。写字生のエラーに基づいたステマ⁶の作成は間違っている。エラーの起こり方は直線的ではない。写本を相互に参照するし、違った写字生がたまたま同じエラーをすることもある。」)

一般的に言えば、マンリー・リカートは、写本群は二つに大別できると考えている。第一グループの写本、彼らが「独立している」と判断している多くの写本は、他の写本とは違っ

て、一貫して“constant (familial) groups” (a)の一員である。マンリー・リカートは、a と結びついた独立写本は、殆どの場合、それ以外の写本よりは、一層よいテキストを基に生み出されたと信じた。つまりそれは“better tradition”をなしている。第二グループの写本、“large composite group”は、少なくとも一つの「独立した写本」(Ha4)と3つの別個の“constant groups” (b, c, d)からなる。しかしこの3つのグループは、しばしば40ものテキストを含む同一系統の“large composite groups”から発生している。写本の第一、第二グループは上記の通りであるが、完璧にいずれかのグループに属するとは限らない。第一グループに一致するのか、第二グループの“large composite group”に一致するのか、両者間を行き来する写本、“alternating manuscripts”がある。

図式的にこの情報を単純化すると次のようになる。

マンリー・リカートの第一グループ : better tradition

独立した写本: E1 (L12 S13) Gg (Do Ph1) Hg

a: Dd En Ds1 Cn Ma

a は、例えば Ln Pp Ry1 Tc1 と結びつき、a*を形成する

マンリー・リカートの第二グループ : large composite group

独立した写本: Ha4

b: He (Ox1 Ox2) Ne Cx1 Tc2

b は、例えば Li Ha3 と結びつき、b*を形成する

c: Cp La S12

d: En Ll1 Lc Mg Pw Ph3 Mm Gl Ry2 Ld2 D1 Ha2 S11

d は、例えば Bo1 Ph2 Bw Ht Ld1 Ra Se To と結びつき、d*を形成する。

マンリー・リカートの第一グループと第二グループ間を行き来する写本

(Ad3 Ha5) Bo2 Ch (En3 Ad1) Fi To

ベンソン版は、F. N. ロビンソン第2版の折衷的な（特定の写本を一貫して使用するのではなく、編者の解釈で複数の写本を取り入れる）方法を採用する。テキストはロビンソンのようにE1を基にしている。しかしマンリー・リカートの精密な検証から、ロビンソンが認識したように、もはや全てのテキストの読みをE1に依拠するわけにはいかない。マンリー・リカートを参照して、ロビンソンはE1のテキストを修正し、他の写本から、特にHgから、おびただしい数の読みを採用している。ハナ III 2013: 164によれば、Hgのパトロンはチャーサーサークル、同僚、バクトンのような小さな宮廷の役人、ホクリーヴのような官僚。E1のパトロンは、かなりの財産と社会的な中心性のあるひと。写字生の仕事はその使用者によって大きく異なる。E1の研究チームはコピーの配列（order）という、Hgの編集に無かったものを試みている。しかしすべての本は本質的に著者を誤って描き出すものだ。本はテキストを通じた著者の再現であり、再現は著者のものではない。

Hgから実際相当数の読みを取り入れるというロビンソンの手法を引き継ぐ。これらの読みは注釈で読者に注意している。ロビンソン第2版のテキストとの違いの全てを示す。しかしベンソン版はなおもロビンソンのものであると思っている。底本（校訂の拠り所とするテキスト）を変更したり、あるいは全ての正しいと考えられるHgの読みを差し込むというよりはむしろ融合版（hybrid）を提示したいと考えている。我々は特にE1を完全に捨ててしまわないように気を付けている。上述のケインの論文にもあるように、マンリー・リカートのE1は精巧に編集が入ったテキストという議論に得心はしていないからである。

以上がベンソン版に至るハナ IIIのテキストの批評史である。

7. 『カンタベリ物語』の物語順序：ハナ(Hanna) IIIに基づいて

物語の配列は、現存写本間で大きなヴァリエーションがある。マンリー・リカートはこの問題を議論し、第2巻の475-94ページで、全ての関連情報を提供している。様々な順序は、物語の提示という単一の問題に二面性のあることが反映している。この難しさは、チョーサーの死(1400年)後10年たって初めて深刻に受け取られた。この問題の一つは、物語の状態である。物語は一般的に最初から最後へ順序よく展開するものだが、『カンタベリ物語』は、その全体像を忠実に写し出すようなものではなかった。テキストは写本であれ、束のようなものであれ、最も完全な状態であったとしても、それぞれ関連付けられていない断片として存在した。それは完全な繋がりのある状態ではなかった。2番目の問題は、一番初めに写本を扱った編者は、完全であるという印象を与えるテキストを再生したかった。その方法では物語と物語が一貫性を持って結び付けられる連続性を求めた。

この二つの問題を考察する際、二つの極論は避けるべきである。(a)チョーサーは物語を明確な順序で残した。(b)チョーサーは物語を無秩序のままに残した。

これらの見解の2番目は、マンリー・リカートによって明言された。チョーサーは現存写本のどの順序に対しても責任をとることはできないとしている。このような見解の支持は、プラット(Pratt, PMLA 66, 1951, 1141-67)によっても論議されている。物語の中の地名は、テキストでは、カンタベリへの実際の道路順に対応して現れないのだ。しかし、これまで何度も議論されてきたように、現存物語ははっきり言って完成されたものではない。それに、物語ははっきり言って最終編集を受けたものでない。チョーサーが地名のような厄介な細目は、実際は容易に扱えなかったのであるが、最終編集で整えようとした可能性は否定できない。新たな証拠がない限り、作者の順序が絶対に存在しなかったという見解は支持しにくい。

チョーサーがはっきりした順序を持っていたという見解も、同様に疑問の余地がある。このような見解、例えば物語の順序についてベンソン(Benson SAC 3, 1981, 77-120)は、芸術的な価値に言及するが、しかし必ずしも作者のものであるという保証はない。「チョーサー的」(“Chaucerian”)として創り出される順序は必ずしもチョーサーの考えたものではない。15世紀の注意深い編者は、自分の考えが容認されるよう順序を構築しようとして、「学者の話」と「貿易商人の話」は、一例を出して言えば、「バースのおかみの序」に続かなければならない、と見立てたとしても不思議ではない。これら二つの物語でのバースのおかみに対するジョークは、もし彼女が前に話していなかったら、その妙味が薄れてしまうだろう。ハナ III 2013: 158-159によれば、詩は、分離したドラフトのbookletで巡回し、いくつかのものはおそらく話し手も決め手はなくリンクもなかった、これがHgの状態であろう。写本はその興味をもつ集団のために、詩人の同志の間に巡回していた「ドラフト」から物語を構築するようアダムに命じたのだ。詩人は完全な「フレーム・ナラティヴ」を完成させてはいなかった。詩人が死んだとき詩は断片的に断章(Fragments)で存在していた。AとB1⁷が最初、断章H(Manciple)とI(Parson)は最後である。しかし中間のテキストはばらばらで写字生は当惑し、写字生は手元にある資料からまずは順序を作っていた。

『カンタベリ物語』の写本は、いくつかの変則的な編集テキストを除けば、4つの順序(order)グループにまとめられる。

a: El Gg En1 Ad3 の順序

I II III IV-V VI VII VIII IX-X

b: Ne と他の b 写本の順序

I II SqT MerT III CIT FranT VIII VI VII IX-X

c: Cp La Sl2 の順序

I Gamelyn II SqT III IV FranT VIII VI VII IX-X

d: Pw と他の d 写本の順序

I Gamelyn II SqT MerT III CIT FranT VIII VI VII IX-X

次の2つの最初期の写本には変則的な順序があるので注意を要する。

Ha4: I Gamelyn II III IV-V VIII VI VII IX-X

Hg: I III II SqT MerT FranT SNT CIT VI VII IX-X

一般的に言って、ベンソン(Benson, SAC 3)とドナルドソン (Donaldson, MedLit. and Folklore, 193-204) が示唆しているように、順序 a がチョーサーの意図に最も近い順序である。Ha4 や c, d の「ガメリン」の挿入は、未完の「料理人の話」(Cook's Tale)を補完し、完全な話に作り上げようとしているに過ぎない。デンプスター (Dempster, PMLA 64, 1949, 1123-42) が示唆したように、順序 c 「学者の話」の順序に置換が見られるが、恐らくは Hg あるいはその直系にある一つを参照して、その次に生じた改編であると考えられる。順序 d と順序 b は両方とも順序 c から派生したものである。後者 b はまがいものの「ガメリン」を削除している。順序 a で唯一通常とは違ったものが、断章 VIII の位置である。この順序の写本群は別だが、FranT-SNT の繋ぎは殆ど揺るがないものである。順序 a は、断章 VIII を、物語の終わり近くで、カンタベリーはまだ先にあるという場所感覚を示すために、動かした可能性がある。

物語順序の最もいいかげんな議論に、順序がばらばらの Se 写本 (Arch. Selden B. 14, Oxford, Bodleian Library) にだけ現れる特性に着目したのがある。これには驚いてしまう。数多くの批評家は、なかでもプラットは、物語内で地名が矛盾しているのを、いわゆるブラッドショー・シフト (Bradshaw shift) によってなきものにしようとしている。このやり方は、「上級法廷弁護士のエピソード」は「船長の話」に関係しないといけない、と仮定し、断章 VII を断章 II に続くよう、物語の最初の方に動かしている。そのような配列順序はグローブ・エディション (Globe edition)、ポー (Baugh)、そしてプラットによって実際に刊行されている。このことで、断章の交替はアルファベットを使って示す必要が生じた。そこでは VII はグループ B2 になり、グループ B1 にくっ付けられた。断章 VI をグループ B2 に従うよう動かすため、グループ C として VI を名付けることになった。このような物語順序を支持する写本の証拠は、全くと言ってよいほど無い。しかしながら、いかにも本質的な批評として、研究者を揺り動かし、多くの研究が生み出された。

ここでハナ III の写本順序の説明に、セイモア (Seymour 1997: 9) を加えておこう。4つの初期写本 (チョーサーの死後 10 年間) の順序の比較である。

MSS.	Hengwrt	Harley 7334	Ellesmere	Corpus 198
I	Knight—Cook	same + Gam	Same	same + Gam
II	-	ML	ML	ML/Sq/Merch
III	WB—Sum	Same	Same	Same
IV	ML/Sq/Merch	Clerk/Merch/Sq	Same	Clerk
V	Franklin	Same	Same	Same
IV, VIII	Nun/Clerk	Nun/CY	-	Nun/CY
VI, VII	Physician—NP	Same	Same	Same
VIII	-	-	Nun/CY	-
IX, X	Manc/Parson	Same	Same	Same

Hg と El の順序は違うことがよく指摘されるが、両写本はチョーサーの最も初期の、しかもアダムが書いた信頼性の高い写本であり、これらに共通点のあることは、チョーサーのオリジナルの構想を示唆しているように思える。セイモアによれば、それぞれの写本年代は、c.1405: Hengwrt, Harley 7334, Corpus 198, c. 1410: Ellesmere である。彼は他に重要な初期写本

として c. 1410: Lansdowne 851, c.1420: Dd.4.24, Gg. 4.27 (Cambridge Univ. Lib.) を挙げている。

以上がハナIIIによるベンソン版に至るまでの物語順序の通史である。

8. マニュスクリプト・コンテキストと活字活版印刷

本節では、写本作成の背景にある重要なコンテキストと写本から印刷本への変化を概括し、写本と初期刊本の電子版多層テキストからどのような読みが可能かを示したい。まずはマニュスクリプト・コンテキスト⁸とはどのようなものか、またその制作に関わる写字生は受け取った手本コピー (exemplar) をどのような態度で書き写したのか、それは単独で行われたのか、それとも複数の仕事分担で組織的に行われたのか。写本は誰に向けて作られたのか。そして写本から印刷本への変化はどのように行われたのであろうか。急激な媒体の変化であろうか、それとも連続体の変化であろうか。ここでは1500年までに出版された『カンタベリ物語』の初期刊本 (incunabula) を取り上げてみる。

『カンタベリ物語』に含まれている話は、エルズミア写本の順序に沿って、あるいはそれを踏襲したベンソン版の順序に沿って、書かれたわけではない。「修道士の話」、「上級法廷弁護士の話」や「第二の修道女の話」のように、早くに別の小冊子 (booklet) で出回っていたものが後に『カンタベリ物語』に統合されたものもあれば (Seymour 1997: 1-2 参照)、後に本物語の構想に沿って書き加えられたものもある。

徳永 (2015: 10-14) は、この点を以下のように明快にまとめている。チョーサーは、中世のコンピラティオ (compilatio)、即ち、教父の著作や神学書、聖書等の権威ある著作から集めた特定の主題に関する章句を、具体的な利用目的にあわせて分類し編纂したものを、14世紀の英語の復権とともに俗語文学に応用した。チョーサーが書いた話は、ある程度テーマごとにまとめられ、小冊子として出回っていた可能性がある。あるいは顧客の嗜好の入った写本アンソロジー (anthology) の中に現に含められていた。CT (*The Canterbury Tales*) の現存写本の四分の一は、このような抜粋作品の入った写本アンソロジーであった。更に、14世紀のうちに、写本概念は、一作者、一著者を納めた本という新しいコンセプトに切り替わる。15世紀には、一写本、一作者、一著作が進んだ。アダム・ピンクハースト制作のヘングウット写本及びエルズミア写本は、一写本、一作者、一著作の実例である。更に注意すべきは、Gg写本は、初めてのチョーサーの全集本の試みで、『カンタベリ物語』は、一写本、一著作、全著作の中で、チョーサー作品の一つとして位置付けられている。冊子体の中世写本の構造は・・・いくつかの帖 (羊皮紙あるいは手漉きの紙を数枚重ねて真ん中で折ったもので、重ねる枚数は地域や時代によって異なった) を束ね、その背を糸でかがって一冊にまとめられている。

チョーサーは亡くなるまで帖と帖をどのように綴じていくのか、その編集過程にあったように思われる。写本において物語の順序に異同があるのは、帖と帖が写字生の再建に委ねられるべく融通性を残していたせいではあるまいか。

アンガス・マッキントッシュ (Angus McIntosh, 1963) は、写字生の写本手本 (exemplar) に対する態度を3つに分類している。

- A. 写字生は手本写本のテキストを一字一句正確に転写して、その言語を全く変更することはない。
- B. 写字生は手本写本の言語を自分の方言に「翻訳」する。
- C. 写字生は A と B の間で作業し、自分の言語と手本写本の言語の混交を作り出す。テキストの言語が写字生と手本写本の形態のいきあたりばったりの混交である場合、それはピジン・混合言語 (Mischsprache) と呼ばれ、方言研究には適していない。

アダムは A, B, C のいずれのタイプであろうか。チョーサーの短詩 *Adam Scryvner* では、下記のように、何度も修正しないとイケないと詩人は不平をこぼしている。

Adam scriveyn, if ever it thee bifalle
 Boece or Troylus for to wryten newe,
 Under thy long lokkes thou most have the scalle,
 But after my making thow wryte more trewe;
 So ofte adaye I mot thy werk renewe,
 It to correcte and eke to rubbe and scrape,
 And al is thorough thy negligence and rape. *Adam Scryvner 1-7*

(写字生のアダムよ、もし『ボエセ』と『トロイラス』を新たに写し取ることがあるとして、私が書いたものに沿ってもっと正しく書き取らないと、お前の長い髪毛の下に、必ずや疥癬(かいせん)ができるぞ。1日に何度もお前が書いたものを改めないといけない、それを正し、またこすって、削ってだ。全てはお前の怠慢と大慌てがやったことからきているんだ。)

書き間違いか、それとも自分の方言に合わせた書き換えなのか。それとも編集態度(口承性重視か書き言葉重視か)の問題か。『トロイラスとクリセイデ』の最後のところで、詩人は言語の多様性、それ故に写字生が韻律を壊してしまうのではと懸念している。

And for ther is so gret diversite
 In Englissh and in wrytyng of oure tonge,
 So prey I God that non myswrite the,
 Ne the mys metre for defaute of tonge; *Troilus and Criseyde 5.1793-96*

イアン・ドイル(Doyle)とM. パークス(Parkes)が同定した写字生 D は⁹、『恋する男の告解』を8写本、『農夫ピアズ』を1写本作成、またトレヴィサ(John Trevisa)のフランシスコ会士 Bartholomaeus Anglicus 作『事物の特質』(*De Proprietatibus Rerum*)の英語訳も行っているが¹⁰、Dの言語には複数の層があることが認められている。西ミッドランドの方言、西ミッドランド出身者がロンドン移住してのロンドン英語、そして Gower の言語に慣れ親しんだことから生じたケント方言がそれである。写字生の方言といってもそれは重層的に生起する。

ドイルとパークスが同定した写字生 B、つまりアダム・ピンクハーストは、チョーサーでは『ボエース』(*Boece*)、『トロイラスとクリセイデ』(*Troilus and Criseyde*)、また他の大物詩人ガワー(Gower)やラングランド(Langland)の写本も手掛けており、書き写しの正確さにおいて相当に信頼を得ていた写字生と見なされる。正確に書き写す、の信頼性からみると、写字生の編集態度、タイプ A に近い写字生と考えられる。共にロンドン英語で、方言的差異が少なかったとすると、タイプ B の異方言に沿った書き換えるの可能性は低い。しかし、共著者としては、ヘングウットとエルズミアの両写本の異同を見るに、部分的に書き換えたタイプ C に位置付けないといけないと考える。方言というよりは編集態度の点で、異同が生じている。ホロビンを再認すると、エルズミア写本は、ヘングウット写本が聴覚的・口承的であるのに対し、視覚的・書き言葉的に見直された可能性があるからである。

写字生が一写本に複数参加していて共同作業をする場合、それぞれを hand 1, 2 ... と呼ぶ。それぞれの写字生の方言が違っていれば、タイプ B, C の形で一写本でも言語的には異同が生ずることがある。明確なエヴィデンスはまだ見つかっていないが、14世紀後期にはロンドンには写本工房ができていた可能性がある。そこで訓練を受けた写字生は、出身の方言は違

っていても、その違いは訓練した言語を使うことである程度薄められた可能性も否定できない。

写字生は著者の検閲を受けながら写本制作したのだろうか。ヘングウット写本は、チョーサーの生前の時から書き始められ、チョーサーの検閲を受けていた可能性が指摘されている。ガワーの『恋する男の告解』(*Confessio Amantis*)は、著者の監督を受けながら制作されたことが指摘されている。ジレプシー (Gillespie, 2011: 21) は、コーパス写本とヘングウット写本は、著者の監督を受けながら写し取られたというスタブズ (Stubbs) の研究を再確認している。この想定が正しいのなら、ヘングウット写本の詩人の言語への近さが一層信憑性を得てくる。著者ではないにしても、写字生間で分業があり、主たるものは、自ら写すだけでなく、従たる写字生の写したものの監督 (supervision) あるいはチェックの担当も兼ねていたかもしれない。

チョーサーのオリジナル (original) が残っていないのは、何故だろうか。元原稿自体が粘土板に書かれていて、口述筆記された後、粘土板はならされ、喪失してしまったのか。粘土版の確認はされてはいないが。このような状態だと、最初の原稿自体既に写字生が介入したものである。あるいはチョーサーの元原稿は「草稿」 (foul copy) の状態であり、それは写字生によって「清書」 (fair copy) に書き取られて、散逸したのか。チョーサーの foul copy のことを考えると、元原稿は修正、書き足しが詩行に、あるいは欄外の注にどっさり書き込まれていたかもしれない。写字生は、いくつかの言語的な選択肢に直面し、その中から詩人の最終選択を選び、fair copy にしないといけない。そのような沢山の可能性の中からの選択は当然書き写しのミスを生発するであろう。チョーサーの辞書体系 (lexicon) 自体変異 (variation) に対して寛容であるという可能性まで考えていくと、ますます異同の選択が難しくなる。ひょっとしたらチョーサーにはどちらでもよかったのかもしれない。写本の異同が、チョーサーの草稿にあった、つまりそれがチョーサー自身の言語候補でもあったとすると、無視できないものである。チョーサーの言語の許容幅の問題に発展する。

写本はチョーサーの存命中には宮廷人を第一場の聴衆として語られた。英語で書かれていることは、その聴衆・読者を広げ、ロンドンの市民層にまで広がっていった可能性がある。15世紀の写本は一部の裕福な貴族や商人等の注文を受けて制作された。時間をかけて制作され、その値段は相当なもので、一般庶民には手の届かなかったものであろう。一つの写本を一人が音読し、それを小集団の人が聞いて楽しんだであろう。個人が書齋で読むという形態は中心ではなかったろう。とは言え、チョーサー自身は数多くの写本を読み深め、換骨脱胎して作品を生み出しており、口承性 (orality) には還元できないリテラシー (literacy) の深さがあることも忘れてはならない。実際写本の視覚的読みからくる、いわゆる句読点の打ち方によって二様三様に解せる詩 (punctuation poem) の機能をムーア (2015) は指摘している。

既に述べたように、写本はたった一冊の本である。15世紀にはいると、「本」の需要が急速に高まり、写本と活字印刷本が共存する事態になる。写本という手書きの原稿は、読者層が次第にひろがり、必要に迫られて、キャクストンの1476年の印刷機の導入で、活版印刷へと切り替えられる。ここに一大革命がおこった。同じ内容の本がいくつも作られようになった。ロバーツ (2015: 213) は、キャクストンと彼の後の好敵手印刷業者は、写字生よりははるかに広い読者層、しばしば英語でしか読み書きができない商人や女性のために、写本所有者よりもっと多くの人々のために、写本に対してもっと効率的に応じた、と述べている。Cf. キャノン (Cannon 2016: 4-5) は、1300~1400年の言語能力 (literacy) の問題を取り上げている。言語能力が、言語を権威の象徴にまで広げた征服王ウィリアム (William the Conqueror) から機械的なその再生産 (活版印刷) に至る過程において、どのように変容したかを説明し、更には教育の観点から学校生徒にグラマーを教えるためのテキストがいかに彼らに文学 (literature) と呼ばれる著作を受け入れるよう促したかを論じている。

写本から初期刊本への移行はどのように起こったか。徳永 (2015: 17-24) は次のようにま

とめている。初期の印刷業者の形態、書体、ページレイアウト等の要素は、写本の伝統を引き継いだ。チャクストンの『カンタベリー物語』は1478年に第1版、1484年に第2版を出版した。第2版では、欄外表題、木版挿絵が視覚的に施され、また物語の配列の変更がされた。第1版に対してある写本を基に修正した。しかし後半部は殆ど手をつけていない。ピンソン(Pynson, 1492)は、チャクストンの第2版を底本に出版した。チャクストンの後継者、ドゥ・ウオード(Wynkyn de Worde, 1498)は、チャクストン版だけでなく、写本も参照して出版した。ド・ウオードが写本を用いて改訂した箇所は、親方チャクストンが初版を改訂した時にほとんど手をつけなかった箇所とほぼ一致する。

次は「騎士の話」からの抜粋で、ヘングウット、エルズミア、ブレイク、ベンソン、チャクストン1、チャクストン2、ピンソン、ドゥ・ウオードからなる電子版多層パラレルテキストの一部である。大野、地村、中尾、川野、佐藤の共同研究で、2016年7月12日の新チョーサー学会第20回大会(ロンドン大学、クイーン・メアリー・キャンパス)で発表した資料の一部である。

```
1954 HG: Gan faillen / whan the herte felte deeth
EL: Gan faillen / whan the herte felte deeth
BL: Gan faillen __whan the herte felte deeth.
BN: Gan faillen __whan the herte felte deeth.
X1: Gan fayl_e_ __whan the herte felith de_th
X2: Gan fayl_e_ __whan the herte felyth de_th
PY: Gan fayl_e_ __whan the herte felith de_th
WY: Gan fayl_e_ __whan the herte felyth de_th
```

```
1955 HG: Dusked hise eyen two / and fayled breeth
EL: Dusked hise eyen two / and failed breeth
BL: Dusked hise eyen two __and fayled breeth.
BN: Dusked his_ eyen two_ and failed breeth.
X1: Dusshid his_ _yen __ __and fayleth his bre_th
X2: Dusshyd hys_ eyen t_o __and to fayleth hys bre_th
PY: Dussheth his_ eyen t_o __and fayleth his bre_th
WY: Dusshyd his_ eyen two __and faylleth his bre_th
```

注：PYはPynson, WYはWynkyn de Wordeを表す。1994, 1995は詩行番号を表す。

1955で見ると、必ずしもピンソンはチャクストン第2版に、同様にウインキン・ドゥ・ウオードもチャクストン第2版に依拠してはいない。また1954、1955行において、4つの刊本はすべて、写本の過去形をfelte→felith/felythに、fayled/failed→fayleth/fayllethと現在形に修正している。初期刊本の校訂はチョーサーのオリジナルを再建するには至っていない。

4節で述べたテキストタイプ、[5]の電子版多層パラレルテキストが完成すれば、ウインキン・ドゥ・ウオードがヘングウットを利用したとしたらどこまでそうなのか、またチャクストンの第2版にどこまで依拠し、またどこまでそれを修正しているのか、更に言えばピンソンはどこまでチャクストン第2版に依拠しているのか、体系的に論ずることができるだろう。ここでは写本と刊本の異同を表す第一級の言語資料が構築され、それを通してチョーサーテキストの作成過程が客観化され、一層精緻で複合的な研究が可能になると期待される。

9. おわりに

以上、写本及び初期刊本は、チョーサーの言語・文学研究の出発点になること、テキストには複数の種類があること、ベンソン版に至るテキスト批評史の詳細、写本から活字活版印刷への移行、中尾他による電子版多層パラレルテキストがテキストを見直す有益な手法であること、そこから新たに見えてくる言語事実ないし読みの多様性を記述・説明した。

写本及び初期刊本の研究は、ムーア（2015）に見られるように、歴史語用論（historical pragmatics）、語り論（narratology）、認知科学（cognitive science）、コーパス言語学（corpus linguistics）等と有機的に絡ませて、一層精緻な研究が推し進められている。池上（2014）が述べた“philology”は、今や認知科学を含む諸種の学問（discipline）と結びついて、新たな展開を迎えている。この研究は、言語構造的な異同の問題を遥かに超えて、その意味論・語用論の段階に進み、読みの新たな層の発掘が期待される。句読点で読みが限定される現代刊本に一端距離を置き、特に写本に見られる柔軟性と曖昧性を一層深く洞察、それを語りの全体像の中で意義付けていくことは、もはや避けては通れないことのように思われる。

*本論では、チャーサー研究において写本及び初期刊本がいかに重要であるかを、現代の刊本をベースに研究している研究者に啓蒙的な意図も含めて叙述・説明した。ハナ III のテキスト批評を加えたのもこのこと故である。池上忠弘先生は、2018年10月20日に急逝された。本論は、池上先生のフィードバックを基に繰り返し書き直した共同のプロダクトである。

注

1. 著者が作成した主たる文字テキストに対して、その活字の解釈を写本レイアウトにおいて欄外の絵画や装飾文字等で文字テキストの解釈を支援したり、場合によっては読者の解釈過程に新たな視点を提供する可能性のある補助テキストのこと。
2. サミュエルズによると、Type IIIは14世紀末から15世紀はじめにかけての中部方言の特徴を含むHg写本やE1写本、またロンドンで作成された文書の言語特徴、Type IVはこの後の中部方言からの導入で特徴づけられた1430年以降の行政文書の言語特徴、「大法管庁の英語」(Chancery English) と呼ばれるもの。
3. 忠実に写本の内容を再現したテキスト。但し、どこまで忠実に再現するかには程度差がある。写本レイアウト欄外の画像、装飾文は通常再現されない。現代的な句読点も最低限に留めるのが普通である。大文字と小文字の扱いや省略文字については、現代的慣習が取り入れられる場合もある。
4. 写字生は見本を必ずしも忠実に転写するのではなく、自分独自の文脈に合わせ書き換えていく。結果として多様なテキストが生み出される。
5. 書き間違いの材源になっている写本群を辿って、写本群の家系図のようなものを作成し、書き間違いから逃れた写本を特定し、それをオリジナルとして想定する。
6. 写本は時間差で一つあるいは複数の見本を基に繰り返し書き写されている。結果、写本の親、子ども、孫等の関係性が想定される。この関係をアナログ的に示した家系図。
7. 『カンタベリー物語』の物語順序は、E1に典型的に見られるように、通例Fragment I~Xのように並べられている（括弧のアルファベットはブラッドショー・シフト(Bradshaw Shift)による再調整結果）。Fragment I (A): General Prologue, Knight, Miller, Reeve, Cook、Fragment II (B1): Man of Law、Fragment III (D): Wife, Friar, Summoner、Fragment IV (E): Clerk, Merchant、Fragment V (F): Squire, Franklin、Fragment VI (C): Physician, Pardoner、Fragment VII (B2): Shipman, Prioress, *Sir Thopas*, *Melibee*, Monk, Nun's Priest、Fragment VIII (G): Second Nun, Canon's Yeoman、Fragment IX (H): Manciple、Fragment X (I): Parson and Retraction。この順序は、早くにはThomas Tyrwhitt (1843)の刊本で採用されている。ベンソンはロビンソンを踏襲し、このFragment I~Fragment Xの順序である。しかしこの順序は、歴史的に見ると、ブラッドショーによって物語の繋ぎ部分（リンク）でのカンタベリーに向けての地名順序に即して再調整された。この順序をスキート (Skeat 1954) は全面的に採用した。彼のグループ順序は、A, B, C, D, E, F, G, H, I。グループBにFragment IIとFragment VIIを統合（それぞれII (B1)とVII (B2)として表示）。Fragment VIIをグループBとして前に移動したため、Fragment VIをグループBに続くもの、グループCとして再調整（VI (C)として表示）。

8. 写本が作成された時の状況は現代の編集本とは大きく異なる。当該テキストがHgのように単独写本である場合もあるが、オーヒンレック写本 (Auchinleck MS, 1330-1340) のように一つの写本の中にロマンスや宗教的な作品が一定の編集方針 (例えば「献身性」

(devoutness)) の基に組み合わせられたものもある。写本レイアウト、装飾文字、まれな句読点、大文字と小文字の使い方等、現代の編集本とは大きく異なる。このような写本に固有な文脈の情報のことを言う。

9. Doyle and Parkes (1978)参照。

10. トレヴィサの英訳本は、後に Wynkyn de Worde 1445, Thomas Berkelt 1535, Thomas East 1582の初期印刷本がある。

参考文献

- Benson, Larry D. ed. 1987, 2008. *The Riverside Chaucer*. 3rd ed. Boston: Houghton Mifflin. / OUP.
- Blake, Norman. ed. 1980. *The Canterbury Tales Edited from the Hengwrt Manuscript*. York Medieval Texts, second series. London: Edward Arnold.
- Boeing, Robert and Andrew Taylor. eds. 2012. *Geoffrey Chaucer: The Canterbury Tales*. Second edition. Broadview Editions, Broadview Press.
- Bordalejo, Barbara. 2003. *Caxton's Canterbury Tales: The British Library Copies*. Scholarly Digital Editions, De Montfort University & Brigham Young University.
- Brewer, D. S. ed. 1969. *Geoffrey Chaucer The Works 1532*. (Scolar Press Facsimiles) London: The Scolar Press. [Folio volume edited by William Thynne and published in 1532 as *The Workes of Geffray Chaucer*]
- ブリュノ・ブラセル著・荒俣 宏監修. 1998. 『A pleines pages Histoire du livre 本の歴史』知の再発見 双書 80. 創元社.
- Cannon, Christopher. 2016. *From Literacy to Literature: England, 1300-1400*. Oxford: OUP.
- Doyle, A. I. and M. B. Parkes. 1978. "The Production of the Copies of the *Canterbury Tales* and the *Confessio Amantis* in the Early Fifteenth Century". M. B. Parkes and Andrew G. Watson, eds. *Medieval Scripts, Manuscripts and Libraries: Essays Presented to N. R. Ker*. London: Scholar Press, PP.163-210.
- Echard, Siân. 2004. *A Companion to Gower*. Cambridge: D. S. Brewer.
- エリク・ド・グロリエ・大塚幸男訳. 1995, 1992. 『書物の歴史』白水社.
- Fraistat, Neil and Julia Flanders eds. 2013. *The Cambridge Companion to Textual Scholarship*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Furnivall, F. J. ed. 1872. *A Six-Text Print of Chaucer's Canterbury Tales in Parallel Columns*, pt. 4, CS 1st ser. 25.
- Gillespie, Alexandra and Daniel Wakelin. 2011. *The Production of Books in England 1350-1500*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hanna, Ralph III, intro. 1989. *The Ellesmere Manuscript of Chaucer's Canterbury Tales: A Working Facsimile*. Cambridge: D.S. Brewer.
- Hanna, Ralph III. 1996. *Pursuing History: Middle English Manuscripts and Their Texts*. Stanford University Press.
- Hanna, Ralph III. 2013. *Introducing English Medieval Book History: Manuscripts, their Producers and their Readers*. Liverpool: Liverpool University Press.
- ヘルム・ブレッサー (轡田 収訳) . 1973, 1979. 『書物の本』法性大学出版局.
- Horobin, Simon. 2003. *The Language of the Chaucer Tradition*. Cambridge: D. S. Brewer.

- 池上忠弘.2014. 「フランス中世文学を巡る雑感」『流域』74号. 京都：青山社.
- 地村彰之・中尾佳行・大野英志・川野徳幸・佐藤健一. 平成27年度～平成29年度 「コンピュータによる『カンタベリー物語』諸写本と印刷本の計量的比較」課題番号 15K02304.
- McIntosh, A. 1963. "A New Approach to Middle English Dialectology". *English Studies* 44, 1-11.
- Manly, J.M. & E. Rickert. eds. 1940. *The Text of the Canterbury Tales: Studied on the Basis of All Known Manuscripts*, 8 Vols. Chicago & London: The University of Chicago Press.
- 松田隆美.2010. 『ヴィジュアル・リーディング—西洋中世におけるテキストとパラテキスト』ありな書房.
- 宮崎志朗・丹治愛編. 2001. 『書物の言語態』シリーズ言語態3. 東京大学出版会.
- Mooney, Linne. 2006. "Chaucer's Scribe". *Speculum*, Vol. 81, No.1, 97-138.
- Moore, Colette. 2015. *Quoting Speech in Early English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 中尾佳行・地村彰之・佐藤健一・川野徳幸・大野英志. 平成29年度～平成31年度 「『カンタベリー物語』Hg, El 写本及び刊本の編集方法と言語・機能の研究」課題番号 17K02529.
- Parkes, M. B. 1992. *Pause and Effect: an Introduction to the History of Punctuation in the West*. Aldershot: Scolar.
- Potten, Ed and Satoko Tokunaga. eds. 2014. "Incunabula on the move: The Production, circulation and collection of early printed books". *Transaction of the Cambridge Bibliographical Society*, Vol. XV, Part 1 (2012).
- R.3.2. Trinity College, Cambridge MS R.3.2 of Gower's *Confessio Amantis*.
- Roberts, Jane. 2015. *Guide to Scripts Used in English Writings up to 1500*. Liverpool: Liverpool University Press.
- Robinson, Pamela R. 1980. 'The "Booklet": A Self-Contained Unit in Composite Manuscript.' *Codicological Litterae Textuales*, 3, 46-69.
- Ruggiers, P. G. ed. 1979. *The Canterbury Tales: A Facsimile and Transcription of the Hengwrt Manuscript, with Variants from the Ellesmere Manuscript*. University of Oklahoma Press.
- Samuels, M. L. 1963. "Some Applications of Middle English Dialectology". *English Studies* 44, 81-94.
- Sargent, Michael G. 2013. "10: Manuscript Textuality." Neil Fraistat and Julia Flanders eds. *The Cambridge Companion to Textual Scholarship*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, pp. 224-35.
- Seymour, M. C. 1997. *A Catalogue of Chaucer Manuscripts, Volume II: The Canterbury Tales*. Aldershot: Scolar Press.
- Skeat, W. W. ed. 1954. *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*. Oxford. Oxford University Press.
- Smith, Jeremy. ed. 1988. *The English of Chaucer and his Contemporaries*. Aberdeen: Aberdeen UP.
- Stubbs, Estelle, ed. 2000. *The Hengwrt Chaucer Digital Facsimile*. Leicester, UK: Scholarly Digital Editions.
- 徳永聡子. 2015. 「写本から印刷本へ—「チョーサー全集」登場の舞台裏」徳永聡子編『出版文化史の東西—原本を読む楽しみ』慶應義塾大学出版会, 1-32.
- Tyrwhitt, Thomas. 1843. *The Poetical Works of Geoffrey Chaucer: with an essay on his language and versification, and an introductory discourse together with notes and a glossary*. London: Routledge.